業平（なりひら）の恋 ― 大淀 ―

在原業平（ありわらのなりひら）は、天長（てんちょう）二年（八二五年）平城（へいぜい）天皇の皇子（みこ）阿保親王（あぼしんのう）の第五子として生まれ、たいそう立派な若者になっていました。

ある日、都からの使いで伊勢の国へやって来ました。業平は斎王宮に泊まり、そこで、伊勢神宮に仕える斎王（恬子内親王（やすこないしんのう））に会いました。

「なんと美しい人だろう。」

業平はそう思ったのです。

つぎの夜、募る恋心にかられた業平は、いつまでも眠れず月をながめていました。

斎王は、聖なる女性として神に仕える身でしたが、業平の熱い気持が彼女を動かせたのか、その夜、禁を破って彼女の方から業平のもとへ忍（しの）んできたのでした。

一夜明けて、斎王から歌が届いたのです。

「ゆうべのことは夢であったのでしょうか。」
と、そこで業平は返歌しました。
「夢であったかどうか今夜もう一度会いたい。」
と、けれどもその夜は歓迎の宴(うたげ)で会うことができず、業平は尾張の国へ行かなければならなくなったのです。

斎王は、業平を大淀の松まで送り、二人は松の下で別れたのです。その時、二人は、悲しみの心を歌で交わしたのです。
「かちびとの　わたれどぬれぬえしあれば」
と斎王がよみ
「またあふ坂の関は越えなむ」
と業平が答えました。

しかし、二人はこれっきりで、二度と会うことができなかったということです。

業平松は約三百年前に枯死、その後、時の代官古郡文右衛門重年(だいかんふるごおりぶんえもんしげとし)という人が、名木の倒れたことを惜しみ二代目を植樹、この二代目も昭和五十年に枯死してしまい、現在、三代目の業平松が地元業平松保存会の手で植えられ、千三百年の歴史をリレーして、付近は業平公園として地元の人達に親しまれています。

3代目業平松と
2代目業平松
（昭和13年（1938））

キーワード：みんわ、大淀、日本遺産、在原業平、斎王、恬子内親王、伊勢物語、業平松

このお話は、昭和56 年に発行された書籍『明和のみんわ』（野田那智子さん編著）をもとにし、登場する人物・建物・その他の名称・読み方などは、原文をしようしています。